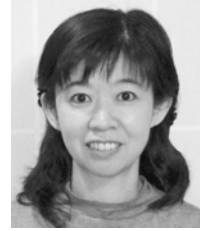


PROFILE

吉村 由美子

自然科学研究機構生理学研究所教授



平成 20 年 2 月 1 日付けで、名古屋大学環境医学研究所より自然科学研究機構・生理学研究所（岡崎統合バイオサイエンスセンター・兼）に赴任いたしました。

学部の学生の頃から漠然と脳に興味があり、山口雄三先生（当時の大阪府立大学教授、故人）の研究室で、卒業研究として痛みの条件付けをテーマとした実験を手伝わせていただきました。山口先生の薦めもあり大阪大学医学研究科修士課程に入学し、学位を取るまで津本忠治先生（現・理研 BSI チームリーダー）のご指導を受けました。スライス標本を用いて大脳皮質視覚野のシナプス可塑性の研究を大学院時代に始め、現在も継続しております。その後、大阪バイオサイエンス研究所で渡辺恭良先生（現・理研 CMIS センター長）、今村一之先生（現・前橋工科大学教授）のお世話になり、これまで行ってきました *in vitro* の解析に加えて、*in vivo* 視覚生理実験を始めました。この時から、脳機能を実現する神経回路の構築・動作原理を理解したいという思いが強くなり、現在に至るまでずっとそのような解析にこだわっております。そろそろ博士研究員の期限が切れるという年に小松由紀夫先生が名古屋大学環境医学研究所に研究室を立ち上げられ、お声をかけていただきました。名古屋大学時代に行った視覚野可塑性の研究で、平成 14 年に生理学会奨励賞をいただき、これはとても励みになりました。この頃、精力的に行ったシナプス可塑性の研究結果には従来の解釈を否定するところがあり、論文が採択されるまでに非常に苦勞いたしました。その過程で多くのことを学びました。また、名古屋大学在職中に米

国ソーク研究所の E.M.Callaway 先生のところへ留学し、ケージドグルタミン酸を用いた神経回路解析の手法を学びました。非常に効率よく研究が進み、わくわくする毎日でした。

生理学研究所は名前のとおり、周囲のほとんどが生理学関係の研究室で、しかも、分子・細胞レベルからシステムレベルと多岐にわたる分野の研究者が集っており、大変刺激を受けております。また、私が生理学研究所初の女性教授だと聞き、驚きました。私が知っているだけでも優秀な女性研究者が何人もおられますので、今後、女性教授がどんどん増えることを期待しております。自分で手を動かして地道に実験を行い、実験結果に導かれることが大事な発見につながると信じています。何かと言えばすぐに成果を要求され、世知辛い昨今、このような考えは時流に逆らっているのかもしれませんが、でも私は、“ぼしっと”したスパイク電位を記録するのが大好きです。これからも時間の許す限り、若い人達に迷惑がられながらも、自分で実験を行いたいと思っております。新しい環境で新しいメンバーと共に、今までの研究をもう一歩進められるよう尽力したいと思います。また、若い生理学者を育てることは急務です。言うまでもなく、生理学は「ものの仕組み」を明らかにする学問ですので、おもしろくないはずがありません。この生理学の醍醐味を若い人達にきちんと伝えられるよう、今まで以上に努力したいと考えております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

略歴

平成元年 大阪府立大学総合科学部 卒業
平成3年 大阪大学大学院医学研究科 修士課程, 博士課程修了(平成7年)
平成7年 日本学術振興会特別研究員(大阪バイオサイエンス研究所)
平成9年 名古屋大学環境医学研究所・助手, 助教授(平成18年), 准教授(平成19年)
平成15年—平成16年

文部科学省在外研究員

(米国ソーク生物学研究所)

平成20年—現在

JST さきがけ研究員(「脳情報の解読と制御」領域)(兼任)

平成21年—現在

自然科学研究機構生理学研究所(岡崎統合バイオサイエンスセンター兼任, 総合研究大学院大学兼任)・教授